



「統計批判」に思う

総務庁統計局統計情報課長

笹島 誉行

1 論争の対象となる統計

昔からこう言われている。悪い知らせを持ってきた使者を叱ってはいけない、悪いのは知らせの中身であって、使者ではない。しかし、現実には、「悪い知らせを持ってくること自体が悪い」ということになってしまうというのはよくある話である。

最近、景気判断との絡みで統計調査に対する批判がしばしば見られる。期待したようなデータが統計調査の結果として現れないと、統計がけしからんということになりやすい。もちろん、完璧なデータというのはいずれも、批判に耳を傾けるべきものもあるが、統計の正確性の議論の前に「こうあってほしい」とか「こうなるはずだ」との思い込みがどうしても入り込みやすい。

以前、賃上げ要求との関係で消費者物価指数の上昇率が過少であるとの批判があったり、「アメリカの定義に合わせると失業率は2倍になる」との「試算」をした学者がいたりしたが、これらは、どちらかという、政府批判というスタンスが基礎にあった。

一方、昨今の論争は、GDPの速報推計における家計調査のデータ利用の問題とか、日銀からの消費者物価指数批判など、統計作成機関内部での議論も活発である点で、従来と異なる特徴がある。日銀の金利政策上の観点等、それぞれ立場が異なるとはいえ、関係機関の間で技術的な面で掘り下げた議論を行うことは、ある意味では健全なことである。

官庁統計は精緻な設計と膨大な労力の上に成り

立っている。また、統計調査である以上、一定の条件の下でのデータ収集・加工であり、当然誤差もある。これらを十分理解した上での議論はむしろ歓迎すべきである。その意味では、昨今のマスコミに登場するCPI（消費者物価指数）批判や家計調査批判にはこの辺の理解が十分でないものが多いのは残念である。

むしろ、行政側としては、説明責任と情報公開の世の中であることを考えれば、単に批判に反論するというのではなく、できる限り統計の作成プロセスを分かりやすく国民に説明していくことが求められるであろう。それが、玉石混淆、種々雑多なデータが氾濫している世の中で、官庁統計の存在価値を理解してもらう手だてであるといえる。

2 リサーチリテラシーの必要性

最近出た本に『「社会調査」のウソ』（谷岡一郎著）というのがある。この本では、『世の中に蔓延している「社会調査」の過半数はゴミである。始末の悪いことに、このゴミは参考にされたり引用されたりすることで、新たなゴミを生み出している。』とし、世の中に出ているデータの信頼性、調査の方法論、分析の妥当性等を痛烈に批判している。

確かに、著者の指摘するように恣意的なデータ収集や的外れの分析が世に溢れている。極めて限定的なグループの調査結果をあたかも国民の代表とするような分析例は枚挙に暇がない。また、同書にあるような「ダイエット食品を食べる回数が

多ければ多いほど肥満度が高い。」という調査結果で、「ダイエット食品が肥満につながる」と早とちりするというのもよくある話だろう。(本当は、当然のことながら、太りすぎの人がダイエット食品をよく食べるということである。)

この本では、官庁における統計分析も槍玉に挙げており、統計行政に携わる我々としても心しなければいけない点が指摘されている。しかし、その批判の主たる対象は研究者やマスコミの恣意的な調査や分析である。確かに、新聞で見る「の調査によると」といったものには、本当にひどいものが多い。そして「ゴミ調査」が多いことが、真に必要な調査の実施を妨げていると著者も指摘している。

そこで著者は、リサーチデザインの明確化が必要であるとして 時期・回収、データ収集方法、質問票、サンプル抽出、分析(手法)の明確化について述べているが、これらは我々も常に心掛けるべき点である。また、そのリサーチが本物であるか否かを見極める能力として「リサーチリテラシー」教育の必要性を訴えている。情報の溢れる世の中であれば、その中で真に必要なものを見極める能力が必要であるというのはその通り

だと思ふ。

以前、某スーパーが独自の物価指数を作成したが、低価格商品の導入による自店の値下げのアピールが主であったので、値下げが一巡したら「使命は果たした」と言ってやめてしまったことがあった。官民問わず、統計を作ることの難しさ、あるいは責任というものを理解するためには、この「リサーチリテラシー」の土壌が必要であるといえるだろう。

最近の家計調査に関する批判も、調査の設計における理論や現状についての認識が不足していると思うことが多いが、リサーチリテラシーの向上のためには、我々としても積極的な情報発信が必要である。最近ホームページにQ&A形式で説明を載せるようになったが、これはそのような試みのひとつであると言えよう。

複雑な経済社会の実態が簡単に分かるはずがないのは当然であり、だからこそ、統計担当者としての苦労もあるし、腕の見せ所もある。常に検証を行い、論争に耐えうる統計調査にしていくこと、そして統計調査の仕組み、使い方を積極的に提示していくことが重要なのだと改めて思った次第である。